

尿中細菌の判定結果が機械法と目視法で乖離した2症例

◎池田 美咲¹⁾、岡田 和大¹⁾、垂水 俊樹¹⁾、久保山 健治¹⁾、棚町 千代子¹⁾、川野 祐幸¹⁾
久留米大学病院¹⁾

【はじめに】尿沈渣検査は、腎・泌尿器系疾患のスクリーニング検査として有用であり、特に膀胱炎や腎盂腎炎などの尿路感染症で、尿中細菌の判定が診断に必須といえる。近年、業務の効率化や迅速化を図る目的で、尿中有形成分分析装置の普及が進んでおり、当院でも自動尿中有形成分分析装置 UF-5000（以下 UF-5000, Sysmex）を導入している。今回、尿中細菌の判定結果が UF-5000 と目視で乖離した2症例を経験したので報告する。

【症例】症例1：60歳代女性。2型糖尿病の加療目的で当院内内分泌代謝内科に入院となった。尿検査提出時には膀胱炎を繰り返しており、前医より抗生物質が投与されていた。症例2：70歳代男性。膀胱癌術後の既往があり、泌尿器科外来に通院中であった。年1回CT検査が実施されており、直近の検査で慢性膀胱炎を疑う所見を認めていた。【検査所見】症例1：《尿定性》白血球反応(±)、亜硝酸塩(-)《尿沈渣》UF-5000では、白血球5~9個/HPF、細菌(-)と判定された。目視では、白血球5~9個/HPF、フィラメント状に細く伸びた形状の細菌を認め、

判定は(1+)と報告した。UF-5000のスキヤッタグラムを確認すると、細菌のスキヤッタグラムでゲートから外れた位置にプロットの集積を認めた。症例2：《尿定性》白血球反応(3+)、亜硝酸塩(+)《尿沈渣》UF-5000では、白血球100個以上/HPF、細菌(-)と判定された。目視では、白血球100個以上/HPF、細菌は多数の球菌が認められ、判定は(2+)と報告した。UF-5000では、細菌のスキヤッタグラムは特に問題なかったが、赤血球のスキヤッタグラムで、不明成分のプロットの集積を認めた。

【考察】結果が乖離した原因は、症例1では抗生物質により菌体に変化したこと、症例2では菌の大きさや形態から細菌と認識できなかったと考えられた。UF-5000と目視の±1ランク一致率は、多施設の検討において良好な結果を示していたが、本症例のように乖離する症例も存在する。そのため、スキヤッタグラムを注意深く確認することで、成分の見落としを防ぐきっかけになると考える。

連絡先 0942-35-3311（内線：6063）